

## 6-1 関係詞の基礎

### 1 先行詞と形容詞節

まず以下の2つの例を見てください。

the house **which** I bought (私の買った家)

the house **where** I was born (私の生まれた家)

これを「説明されている名詞」と「その名詞を詳しく説明している部分」に分けると、次のようになります。

説明されている名詞	その名詞を詳しく説明している部分
↓	↓
the house	{ <b>which</b> I bought }
the house	{ <b>where</b> I was born }

この関係代名詞 **which** や関係副詞 **where** のまとめるカタマリ(上の例では { } 内の部分)が詳しく説明している名詞(上の例では the house)のことを「先行詞」といいます。先行詞は原則として名詞です(例外はあります☞ p.180)。したがって、その先行詞を説明する { } 内の部分(上の例でいうと、**which** I bought と **where** I was born)は、全体が「名詞を説明している」ので「形容詞」の働きをしていると考えることができ、また、{ } の中に SV がありますから「節」です。したがって、分類上は「形容詞節」ということになります。

「ちょっと待ってくれ! なんで「関係代名詞」や「関係副詞」で始まっているのに「形容詞節」なんだ!」と、ここで混乱する人が非常に多いのですが、それはどの部分がどの語句を修飾しているの

か、という関係をしっかりとらえていないからです。そこで、次の関係副詞 **where** を使った文を見てください。

This is the house **where** he lives. (これは彼が住んでいる家だ)

典型的な誤解は「関係副詞 **where** が直前にある先行詞 the house を修飾している」というものです。いいですか、**the house** を修飾しているのは **where** ではなく、**where** のまとめる節全体、すなわち **where he lives** 全体です。**where** は関係副詞ですから品詞は「副詞」で、the house という名詞を修飾することはできませんし、そもそも節の内側にある語句が外側にある語句を修飾することは絶対にありません。関係副詞 **where** は直後にある **lives** という動詞を修飾しているのです。

ところで、「『形容詞節』って名詞を修飾するわけだから、要するに『関係詞節』と同じ意味?」と考えた人がひょっとしているかもしれませんが、この2つは同じ(意味)ではありません。関係詞の中でも、関係代名詞の **what** や、先行詞を含んだ関係副詞は「名詞節」をまとめますし(先行詞を含んだ関係詞のことを「自由関係詞」と呼ぶことがあります)、一方、接続詞の **before** や **after** の導く節は、以下の例のように、その節全体が直前にある名詞にかかることがあり、その場合は名詞を修飾していますから形容詞節に分類されます。

All the years **before** Christ was born are called B.C.

(キリストが生まれる以前の年はみな BC と呼ばれる)

☞ before Christ was born という節全体が前の the years を修飾

I can still remember those exciting days **after** my first daughter was born.

(私は長女が生まれた後のワクワクした日々を今でも覚えている)

☞ after my first daughter was born 全体が前の exciting days を修飾

## 2 関係詞の種類

「関係詞」というのは最後が「詞」で終わっていますが、品詞の名前ではありません (☞ p.012)。関係詞の品詞は「関係」という言葉の次にちゃんと書いてあります。

- 関係代名詞は「代名詞」
- 関係副詞は「副詞」
- 関係形容詞は「形容詞」

関係詞は節の中で、その品詞の役割をはたしています。たとえば関係代名詞は「代名詞」ですから、節の中で代名詞の働き (= 名詞の働き)、つまり「主語、目的語、補語、前置詞の目的語」のどれかの役割を担っています。ちなみに、「関係代名詞」の「関係」というのはイメージとして「2つの文を『関係づける』 (= つなぐ) 働き」を持つこと、だと理解すればいいでしょう。つまり、**関係代名詞とは「2つの文をつなぐ働きも兼ね備えた代名詞」と**考えることができます。

ここで関係詞の種類をまとめておきましょう。

① **関係代名詞**：次のように先行詞の種類と格により分類されます。

		主格	所有格	目的格
先行詞が	人	who	whose	whom
	物	which	whose	which
	人・物	that	—	that

② **関係副詞**：**when, where, why, how** の4つ。ただし **that** も特定の条件下で関係副詞のように使われることがあります。なお関係副詞は「副詞」ですから、関係代名詞と違って「格」はありません。

③ **関係形容詞**：「関係形容詞」の種類や用法については p.177 以降で詳しく扱いますので、そちらを参照してください。

## 3 関係詞の格と省略

先ほどの表の中に「主格」とか「目的格」といった用語が出てきました。関係代名詞の「格」の考え方は、基本的に代名詞の場合 (☞ p.072) と同じです。ただ、「which や that は『主格』も『目的格』も同じ形だから区別しなくてもいいのでは？」なんて思っている人もいるかもしれませんね。次の文を見てください。

(a) This is a book **that** will be useful for both students and teachers.

(これは学生にも教師にも役立つであろう本です)

(b) This is a book **that** I bought last week.

(これは私が先週買った本です)

(a) の **that** は **will be** の主語だから主格、(b) の **that** は **bought** の目的語として働いている目的格です。では、これらの **that** を区別する理由は何でしょうか？ 原則として、**目的格の関係代名詞は省略できるが、主格の関係代名詞は省略できない** (もちろんそれぞれ例外はあります) というルールがありますから、(a) の **that** は省略できませんが (b) の **that** は省略できます。関係代名詞は何でも省略できると思っている人が結構いるので、こういうちょっとしたルールを理解するのにも関係詞の「格」がわかることが必要なのです。

さて、では次の文を先ほどの (b) と見比べてください。

(c) This is a book *I bought* last week.

この (c) の文を文法的に説明する場合、たいいていは、まず (b) のような関係代名詞を使った文を習い、「(c) は (b) の文から目的格の関係代名詞が省略された形」と説明されます。でも、ネイティブスピーカーが (c) のような文をいうとき、まず (b) のような関係代名詞を使った文をいったん思い浮かべて、そこから関係代名詞を省略しているはずはなく、いきなり (c) のような文を口にするは